

館長室だより ⑤

巨匠の足跡

図書館長 江澤 聖子

酷暑の夏が過ぎ去り、音楽が心に沁みる季節になってきた。レッスンでは、学生から今勉強している曲の音源を推薦してほしいと言われることもあり、この演奏家を聴いてはどうかと薦めている。時にはこちらから誰の演奏を聴いたかと尋ねるが、はて演奏者の名前を把握しておらず、慌てて確認する学生も少なからずいる。

筆者の学生時代は、20世紀ピアニストの歴史上燦然と輝く、世界最高ともいえる演奏家の録音が身近にあり、誰が何をどう解釈して弾いているのかを探りながら、巨匠たちが極めた芸術からその奥義を学び取ることに夢中になった。ベートーヴェンのピアノソナタの全曲録音を最初に行ったアルトゥール・シュナーベル (Artur Schnabel, 1882-1951) が編纂したピアノソナタ全集は常に傍らにあったし、ウラディーミル・ホロヴィッツ (Vladimir Horowitz, 1903-1989) の圧倒的なエネルギーを持つ音色を自ら出せるようになりたいとピアノに向かって奮闘した時期もあった。クラウディオ・アラウ (Claudio Arrau, 1903-1991) が1987年に行った最後の来日公演では、レコードより遥かに立体感のある深く暖かい音と音楽に身も心も満たされる思いがした。これら全ての感動的な経験によって自身の音楽の方向性が導かれたと言っても過言ではないが、今の学生達はこのような体験をしているのだろうか。

今年ドイツの巨匠ヴィルヘルム・バックハウス (Wilhelm Backhaus, 1884-1969) の生誕140年にあたる。ベートーヴェンが亡くなった57年後に生まれ、13歳を迎えた1897年にはブラームスがその生涯を閉じている。シューマン、ショパンが17歳でベートーヴェンの訃報に接したことを考えると、偉大な作曲家と同じ空気を吸い共に生きながら、おそらく現代とは全く異なる感覚で彼らの作品を聴いていたに違いない。

バックハウスは1969年に「ケルンテンの夏音楽祭」のこけら落とし公演として、オーストリア、ケルンテン州オシアツハのシュティフト教会での演奏会に出演した。公演2日目、ベートーヴェンの《ピアノソナタ 作品31-3》の演奏途中で心臓発作を起こしたが、医師の制止を振り切り、曲目を変更して最後まで演奏を続けた。ソナタの最終楽章に代わって弾かれたシューマンの《夕べに》《なぜに》での比類なき美しさと優しさ。そして最後に演奏されたシューベルトの《即興曲 作品142-2》の瑞々しい響き・・・！病を押しても最後まで聴衆に音楽を届け、ピアニストとしての人生を全うしようとした（この公演の7日後にこの世を去った）バックハウスの尊い精神に、畏敬の念を禁じ得ない。

バックハウス最後の演奏会のCD：『Sein letztes Konzert : 28th June 1969』
請求番号●XD27381

資料の部屋 ⑱ 日本音楽と私たちの感性

吉田 直輝

「日本で音楽といえば、やっぱりピアノやヴァイオリンの音楽よね。どうして私が箏や三味線の音楽を知らないからって、非難されなきゃならないのよ。」

音大ピアノ科卒のガクちゃんの悲痛な叫びから、本書は始まります。なるほど、確かなになぜ日本音楽のことを知る必要があるのでしょうか？

困惑するガクちゃんに、日本音楽にくわしいクニちゃんが講義をする、という形式で本書は進みます。ガクちゃんと一緒にクニちゃんの解説を聞くうちに、読者もだんだんと日本音楽の解像度が上がっていきます。そして、ともすればお正月と授業でしか耳にしないものと思われがちな日本音楽が、実際には私たちの感性の奥深くまで根を張っている事実気づかされるのです。

私は趣味で尺八を吹くのですが、尺八を知らない人に説明をする時、まず紹介するのが宮城道雄の《春の海》です。「お正月に流れるアレ」でたいい伝わる、言わずと知れた箏と尺八の二重奏曲ですが、ある時「ヴァイオリンかフルートじゃだめなの？」と言われて答えに窮しました。確かに《春の海》の尺八パートは

ヴァイオリンやフルートで演奏されることもあるけれど、尺八の方が「らしさ」があるんだよね——と思いつつ、それを上手く言葉にできませんでした。本書を読んだ今なら、その「らしさ」の正体を「^{そうおん}噪音」という言葉で説明できます。

私たちは、どんな音楽に日本らしさを感じるのか？なぜそう感じるようになったのか？本書は、そんな日本人の音楽的感性のルーツをめぐる冒険です。スマホでグローバルな音楽に触れられる今だからこそ、足元のローカルな日本音楽に目を向けてみてはいかがでしょうか。その先に、きっと新しい発見があるはずです。



『日本音楽がわかる本』
千葉優子著 音楽之友社 2005
請求番号●J104-369



よしだ なおき(図書館職員) ● アルミニウムから削りだして作る「メタル尺八」が界限で話題です。尺八らしさの定義も変化していくのかもしれませんが。